

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：32692

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520663

研究課題名(和文) 学習者自律にむけた自己動機づけ方略獲得への支援の試み

研究課題名(英文) How Learners of English Use Self-Regulatory Strategies

## 研究代表者

植田 麻実 (Ueda, Mami)

東京工科大学・教養学環・教授

研究者番号：00184937

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、英語学習者の「自己調整学習ストラテジー」に関して、1059名の大学生を対象として調査したものである。被験者の60%が英語習得に最も影響がある要因として「自分自身」を挙げ、50項目の「自己調整学習ストラテジー」の因子分析の結果、「英語を駆使する自分像をイメージするストラテジー」が鍵となって他の因子とも結びついていることが判明した。またいわゆるSNSをストラテジーとして使用する事に関しては、自由記述からは、YouTubeで音楽を聴くなどが効果的なストラテジーとして多く挙げられた。今後は学習者が自ら英語学習を進める手段の一つとしてSNSとの関わりに関しても調査の必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：This research aimed at what kinds of self-regulatory strategies were taken by university students to learn English and how they were used. Our participants of the research were 1059 university students who learned English in eighteen universities throughout Japan. As the most influential factor for acquiring English, 60% recognized themselves to be crucial factor. The following factor analysis showed that the participants imagining themselves to use English in the future had the strong motive. As for the free writings, activities accompanied by social networking services (SNS) were considered to be effective. The participants as a whole tended to use rather traditional self-regulatory strategies, and those who had actually engaged in SNS as their English learning, however, found SNS usage to be effective self-regulatory strategies.

研究分野：第二言語習得

キーワード：自己調整学習 motivation

### 1. 研究開始当初の背景

この研究は、学習者の動機づけとの関連性が指摘されてきた学習者の自律に焦点を置き、学習者が自らやる気を保ち効率良く学習を進めるために使用している self-regulatory strategies (自己調整学習) に関して理解を深めることを目的とした。前回の平成 20 年度から平成 22 年度に亘り行った基盤研究(C)『リメディアルの視点から 大学生の英語学習意欲減退調査と学習者自律へのニーズ分析』(20520529) で明らかになった、英語学習者が学習意欲を無くすきっかけや、その時期、そして一度学習意欲を無くしてしまっても、もう一度学習意欲を取り戻した場合とそうではない場合の違いなどを基にして次の段階、すなわち学習者が自ら使用でき、そしてやる気を無くさないための手段に関しての考察を深めることとした。学習意欲を一度無くしても、自ら再び学習意欲を回復する resilience (回復力) そして、学習意欲を自ら保つストラテジーが前回の調査では注目すべきテーマとなった。では、そうした resilience の手立てとしての self-regulatory strategies にはどのようなものを系統立てることができ、それらはどの程度学習者たちによって使用されているのであろう。このことは、教育者である我々が学習者の自律 (learner autonomy) の観点に立ち、教育の現場でできることを確認していく作業でもあった。学習意欲を一度無くしても再び取り戻すきっかけとなった要因としては、教師(学校、塾、家庭教師など)との出会いや、受験や TOEIC といった試験などの目標や、努力する過程で感じることができた達成感などが挙げられた。これらのことから、人間関係が大きな回復要因となっていたことが判明し、受験などの具体的な目標なども、学習者によっては、学習意欲回復の要因として機能していたことが明らかとなった。

また学習意欲回復のためには、動機づけを無くしてしまっている状態であっても Nakata (2006) で指摘されているように回復可能な心的状態か、その度合いを見極めることの必要性が示唆されてきた。また前回の調査では早い時期、すなわち中学一年生の間に意欲を失った被験者は、それよりも遅い時期に意欲を失った被験者に比べて再び意欲を取り戻した割合が小さかった。

英語学習の早い段階からずっとわからないままにきてしまった学習者にとっては自らの力で大学時に英語習得への学習意欲を取り戻すことは困難なケースが多いことが明らかとなった。

今後の社会のグローバル化の加速やそこでの共通言語としての英語の存在を鑑みると学習意欲を持ち続けるための自己防衛手段を持つこと、すなわち、学習意欲を無くしてしまっても、再び機会をとらえて学習を始められる resilience が求められることは必ずである。

### 2. 研究の目的

こうした背景を基に、本調査では、学習意欲を回復、あるいは失わないために学習者が自ら行っている self-regulatory strategies についてその詳細を調べ、それらを学習意欲が低下している学習者たち、あるいは、英語学習の段階が今後伸びる余地を残している学習者たちに実際に体験してもらうことでその感想を得、汎用性のあるリストとして構築することを目的とした。

### 3. 研究の方法

予備調査として研究分担者である杉野を中心とし、本研究の四人のメンバーがそれぞれ担当する英語クラスを受講していた学生の中から英語学習に長けている者や英語学習に対して意欲がある者(計 14 名)に協力してもらい、個人の聞き取り形式をとって、それぞれの学習者から、英語学習の個人史、どの時期でどのような英語学習の意欲に関しての体験をしたか、英語学習の意欲を過去に無くしたとしたら、そのきっかけは何だったのか、学習意欲を回復したきっかけは何だったのか、どのようなストラテジーを使っているのか、について、インタビュー及び文章によって回答をもらい、それをすべて文字におこしコーディングを行い、そのコーディングの結果からいくつかの self-regulatory strategies としてのカテゴリーを得た。

この予備調査をもとに本調査に向けての Likert スケールによる自己申告形式の self-regulatory strategies の項目を四人で作成した。これらの項目は、self-regulatory strategies をすでに構築している伊藤(2011)や Oxford(2011)を基にして、予備調査で帰納的な形で浮上したカテゴリーを加え 50 項目とした。

また同時に自由記述としてどのような具体的な工夫をして英語の学習を行っているかを答えてもらうこととした。

調査の実施に際しては、本調査は四人の所属する学会のメンバーにも協力の呼びかけを行い 2013 年の春学期に全国 18 校の大学で英語のクラスを履修している学生たちを対象にして実施した。50 項目の self-regulatory strategies に加えて、自律に関して被験者たちはどのように感じているのか調べるために、アンケート最初の部分に、英語習得に影響があると考えられる、(1)自分自身の努力、(2)英語のクラスやカリキュラム、(3)日本社会がどれくらい英語を必要としているか、の 3 項目の中からもっとも影響が強いと思うものを一つ選んでもらった。

2014 年にはこれらの結果の中から、阿部を中心として学習者たちが学習意欲を保つのに、willingness to delay gratification と呼ばれる、当座にしたい事を我慢して成功へと自らを導く手段に対してどのように考えているのか、ということについて新たな被験者

たちに対してリサーチを行った。また杉野を中心として回答者のうち英語習得の進んでいると考えられる英語を専攻とする偏差値の高い大学の被験者たちが使っていた self-regulatory strategies をリストにし、それを 2014 年の秋学期に、中級、初級レベルの学習者たちに三週間にわたって実際に試してもらいその結果をまとめた。

#### 4. 研究成果

予備調査では、英語の学習意欲を無くしたことがない、と回答した被験者 4 名を含め、学習意欲を無くさないために行っている工夫や、英語学習の目的を短期と長期で設定していること、気分を変える工夫をしていること、英語を嫌いと思わないようにしていること、TOEIC などの試験を目標とすること、積極的に英語を使う機会を作っていることなどが挙げられた。これらの結果を本調査での項目として加えた。

被験者たちの聞き取り調査から上記のような戦略が浮上したのと同時に、被験者のうち英語能力が高い者の中には大検を受けてきた者や公立高校への進学をあきらめざるをえなかった時に自ら外国の高校を見つけ留学を経験したものなど、苦境にたった時にもあきらめずに前進を続ける resilience が認められる被験者もいた。日本にいて中学・高校と学校で教育を経験するというとは別の選択肢が活用されている現状もわかった。

本調査では全国 18 の大学へのアンケート調査のうち欠損値が無いもの 1059 名分を分析に使うこととした。結果としては被験者のうち 60% が英語習得に最も影響がある要因として (1) の自分自身の努力を挙げた。次いで (2) の英語のクラスやカリキュラムを挙げたものが 21%、(3) の日本社会がどれくらい英語を必要としているか、を挙げた者が 18% であった。被験者たちの半数以上が自分自身こそが英語習得に一番影響を及ぼすと答えたことは当初の予想よりも多い数値であった。

次に、50 項目の self-regulatory strategies (Likert スケールにて 1~5 で自己申告してもらったもの) に関して記述統計をとった。その結果として平均値が高かった項目は高い方から順に、休みを入れながら学習する、テキストに直接書き込みをする、自分でできそうところから問題を解き始める、ノートを取る時はきちんと取る、飲食などしてくつろぐ、勉強の後のイメージを持つ、時間や量を決めてやる、理解しているところから勉強する、勉強をする心構えができてからとりかかる、勉強をしながら飲み食いする、簡単な作業を織り交ぜてやる、などであった。

これらの平均値が高かった項目をまとめてみると、実際の英語学習をどのように工夫しているのか、ということに関しては 2 項目 (教科書への書き込みと分かりやすいノー

ト)にとどまり、あとの 8 項目は英語学習にとりくむための情意要因のコントロール手法や勉強に取り組むための環境を自分なりに工夫している、ということであった。これらからは、英語学習そのものの手法としてよりも、環境面や情意要因に関しての方が、より多くの被験者たちが工夫しやすい事項であることが分かった。到達レベルの高い学習者を抽出し、その学習者たちが実際に行っている self-regulatory strategies を、ほかの学習者 (特に達成度が中級、初級レベルの学習者) に実際に使ってもらい、その差異を調べるといった杉野を中心とした調査は、これらの結果から現状が見えてきたため行うことが可能となった。この事後調査からは、上級者が自ら使っている割合が高かったストラテジーの内、外国人と英語で話す、会話学校に通う、などの他者とのやりとりを含むストラテジーを選択した者は少数に留まり、英語の音楽を聴く、YouTube を見たり聴いたりする、DVD を使って単語を学ぶ、など一人でできるストラテジーが多く選択された。全体としての self-regulatory strategies の傾向とは別に、到達レベルによっても使いやすいストラテジーに傾向があることが示唆された。

本調査に戻るが、Self-regulatory strategies のうち使用する平均値が低かった項目は、会話学校など学校の外で英語を話す機会を作っている、外国人や外国に住んでいる日本人の友人から学んでいる、英語の漫画を英語学習に利用している、Eメールで英語のやりとりをしている、アルバイト先で英語を使う機会がある、学内の教室以外の場所で英語をチューターなどに質問している、Facebook の中で英語を使っている、YouTube で英語の書き込みをしている、Skype で英語のやりとりをしている、などであった。

会話学校や、学内の教室以外で英語を使って話せる、例えば学習支援センターなどに積極的に通うという項目は、経済的、あるいは時間的に困難な場合も含め、当初の予想通り低い数値となった。しかし、最近登場してきた Facebook, YouTube, Skype などいわゆるソーシャルネットワーキングサービス (SNS) と呼ばれるものを学習に取り入れることに關しては、予想ではもう少し高い値を期待していたが、実際は英語学習を自己統制してやるためのストラテジーとして取り入れている、と回答した者は少ない結果になった。

YouTube に関しては、英語の書き込みを読む、というインプットに關しての項目はストラテジーとしての使用は比較的高く、実際に英語を書き込むという英語によるアウトプットとの間に差があることも判明した。

50 項目の中で平均値が最下位であったのは、ゲームをしながら勉強する、という項目であり、音楽やテレビなどを見ながら勉強をする、という項目などと比べても学習者らがゲームは所謂「ながら的」な勉強と両立させられないことを実感していることも分かっ

た。この結果は見方を変えれば、ゲームをしている時間の長さが、その間は全く勉強をしていない時間となっていることも示唆されている。

また、SNSにおいては、自由記述として具体的にどのようなストラテジーを有効に使用しているのか、に関しては、実際に書き込みをした被験者たちからは、YouTubeで音楽を聴くということなどが多く挙げられた。この結果から、『学習』として聞かれた時には否定するが、無意識のうちに実際にはかなりSNSを身近に使って生活しているのではないだろうか、という推測もなされる結果となった。また、被験者全体としてはSNSを英語学習に使っている被験者は多いとはいえなくても、実際にSNSを使っている被験者は、有効に使っているという感覚を持っているという結果といえるであろう。

50項目のself-regulatory strategiesは床面効果(floor effects)の出た6項目を除き探索的因子分解を、主因子分析、プロマックス回転でSPSSを使い行い、7つの因子が検出された。

それらは、第1因子『L2self(英語を駆使する自分像)をイメージするストラテジー』( $\alpha=.895$ )、第2因子『何を通して英語を学ぶか工夫するストラテジー』( $\alpha=.858$ )、第3因子は『英語の勉強をオーガナイズできるストラテジー』( $\alpha=.816$ )、第4因子『楽しみながら英語を勉強するストラテジー』( $\alpha=.846$ )、第5因子『英語学習に緩急つけられるストラテジー』( $\alpha=.646$ )、第6因子『前向きに考えるストラテジー』( $\alpha=.944$ )、第7因子『教室以外での英語の学習機会を作るストラテジー』( $\alpha=.688$ )と命名した。

次にこれら7因子の間の相関関係を調べた。第1因子『英語を駆使する自分像をイメージするストラテジー』と、第2因子である『何を通して英語を学ぶか工夫するストラテジー』との間には強い相関が認められた( $\alpha=.699$ )。第1因子は第3因子『英語の勉強をオーガナイズできるストラテジー』との間にも比較的高い相関があった( $\alpha=.555$ )。さらに第1因子と第5因子『英語学習に緩急つけられるストラテジー』の間にも比較的高い相関が認められた( $\alpha=.519$ )。そのほかの相関としては、第2因子と第3因子との間の比較的高い相関( $\alpha=.499$ )、同じく第2因子と第6因子『前向きに考えるストラテジー』との間( $\alpha=.414$ )にも比較的高い相関がみとめられた。また、第3因子と第6因子との間にも比較的高い相関が認められた( $\alpha=.479$ )。

これらの相関からは、第1因子が鍵となってほかの因子と結びついている様子が見て取れる。この第1因子を構成している項目は、英語を使う自分のイメージのほかに、将来仕事で英語を使えるように勉強している、英語でコミュニケーションをとれるようになることを目標に勉強をしている、英語を使って

社会貢献することを考える、海外旅行をした時のことを考える、留学をめざして英語を勉強している、など将来仕事やレジャーも含め英語を実際に使うという意思が見てとれる項目である。

第2因子を構成している項目は、英語の漫画を英語学習に利用している、英語の小説やエッセイなどを英語学習に利用している、英字新聞・雑誌などを英語学習に利用している、多読・多聴を英語学習に利用している、外国人や外国に住んでいる日本人の友人から学んでいる、TOEICを受験してある点数以上を目標にして英語を勉強している、であり、様々なツールや具体的な目標を設定していることを物語っている。英語の漫画に関しては、被験者全体の平均値としては低かった10項目に入っていたにも関わらず、第1因子との結びつきの強い因子の項目としては上がっている。つまり英語を使う将来像が描けている学習者にとっては、様々なツールの一つとして英語を漫画で学ぶことは使われている確率が高いことを示唆している。

また第1因子と第3因子との相関も比較的高かったのに反して、第1因子と第4因子との間には比較的弱い相関しか認められなかった。このことから、楽しみながら勉強をする、という第4因子よりも、第3因子を構成している、苦手なところを徹底的にやる、教科書に重要事項などを書き込む、わからないことはこまめに先生に聞いておく、単語帳など手作りのもので整理している、などの真面目な取り組みをストラテジーとして選んでいることが、英語を使う自らの将来像と結びつきやすいことが推測された。

本調査では、当初の予想を上回り自分が英語学習成功の鍵と答えた被験者が6割に上ったことから、自分で選択することのできる英語ソースがますます多様化してきている現代において、あまりまだその使用が認められなかったSNSを、どのように英語学習、とくに学習者自身が選択して英語の授業とは別に、あるいは統合させて積み上げていくのか、その自律した学習をSNSはどのように利用可能にしているのかなどに関しても解明を進めていくことの必要性が示唆される結果となった。

また、自分で英語を使うイメージを駆使できる、ということが英語の勉強の動機づけとして大きな鍵となっていることも判明した。英語を使うということに関しても、日本で使うのか、ネットに向き合って使っていくのか、海外に出て使うのか、などそのイメージをもっと詳細に調べていくことが、どのようなコンテンツを英語学習に使っていくのが適切なのか、どのような技術や知識を英語学習のコンテンツと合わせて教授していくべきなのか、そうした今後の議論へつながっていく示唆となった。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

Sugino, T., Ueda, M., Abe, E.,  
and Shimizu, S. (2015). How can motivational strategies facilitate autonomous learning for Japanese EFL students? 学習者自律にむけた自己動機づけ方略獲得への支援の試み 基盤研究(C) 24520663 自費出版冊子、査読無、pp.64-72.

Ueda, M., Sugino, T., and Abe, E. (2014). How social networking services change Japanese English learners' motivational strategies. *Selected Papers from the Twenty-third International Symposium on English Teaching*. 査読有、pp.326-332.

Ueda, M., Sugino, T., and Abe, E. (2013). How learners of English in Japan use self-regulatory strategies. *Selected Papers from the Twenty-second International Symposium on English Teaching*. 査読有、pp.393-402.

杉野俊子、植田麻実、阿部恵美佳、清水順. (2013). 自律学習に役立つ動機づけストラテジーの理論と実践、工学院大学研究論叢、査読有、第51(1).13-26.

Abe, E. & Ueda, M. (2013). Technology-based project work: Enhancing English learning motivation in Japanese university students. *ILAC Selections: 5<sup>th</sup> Independent Learning Association Conference*. 査読有、pp.129-131.

Sugino, T., Ueda, M., Abe, E., and Shimizu, S. (2012). Motivational Strategies: How do learners keep their motivation and cope with demotivation? *The 11<sup>th</sup> International Symposium on Advanced Technology*. 査読有、pp.10-11.

[学会発表](計6件)

Sugino, T., Ueda, M., and Abe, E. (2014). How can motivational strategies facilitate autonomous learning for Japanese EFL students? *CLaSIC 2014*. at National University of Singapore. 2014年12月4日. Singapore.

Ueda, M., Sugino, T., and Abe, E. (2014). How social networking services change Japanese English learners' motivational strategies. *English Teachers Association-ROC*. at Chien Tan Overseas Youth Activity Center. November, 15<sup>th</sup>. Taipei, Taiwan.

植田麻実. (2014). 最近のモチベーション研究からみた英語学習ストラテジー. 日本実用英語学会. 早稲田大学. 2014年1

月25日. 東京.

Ueda, M., Abe, E., and Sugino, T. (2013).

How learners of English in Japan use self-regulatory strategies. *English Teachers Association-ROC*. at Chien Tan Overseas Youth Activity Center. November, 9<sup>th</sup>. Taipei, Taiwan.

Sugino, T., Ueda, M., Shimizu, S. and Abe, E. (2012). Motivational Strategies: How do learners keep their motivation and cope with demotivation? *The 11<sup>th</sup> International Symposium on Advanced Technology*. 工学院大学. 2012年10月30日. 東京.

Abe, E. and Ueda, M. (2012). Technology-based project work: enhancing English learning motivation in Japanese university students. *Independent Learning Association Conference*. At Victoria University. September 1<sup>st</sup>. Wellington, New Zealand.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

植田 麻実 (UEDA, Mami)  
東京工科大学・教養学環・教授  
研究者番号: 00184937

(2) 研究分担者

杉野 俊子 (SUGINO, Toshiko)  
工学院大学・基礎・教養教育部門・教授  
研究者番号: 90531757

(3) 連携研究者

阿部 恵美佳 (ABE, Emika)  
大東文化大学・外国語学部・非常勤講師  
研究者番号: 30468623

(4) 研究協力者

清水 順 (SHIMIZU, Sunao)  
立教大学・全学共通カリキュラム・非常勤講師